

## 階級道德と無政府道德

——特に婦人のために——

### 一 道德とわれらとの関係

無産者に、道德などが、なんで必要なのか。そんなものはお寺の坊さんとか、学校の先生とかにあずけておくがよい。まして不景気の今日、そんなことは全然、問題にはならぬという者があるようです。

しかしながら、こんなこともいわれている。いわく「経済的の困難だけで革命は生れない」

クロボトキンにもそんな言葉がある。「単なる経済的の窮乏からは、一揆や暴動は生れても、革命は生れない」

レーニンにもある。「あらゆる革命は、搾取され、圧迫されるところの大衆が、このままでは生きて行かれぬと悟り、何等かの変化を要求するというだけでは生れない」では？

クロボトキンは言う。「それらの諸事情と、普遍的な思潮との合致によつて、革命は生れる」(レーニンも)

そして、それと共に、こういうことがいえる。「普遍的な思潮のみでも、革命は生れない」と。

では？ いわく、

「それらのすべての諸事情と、正義感(道德)との一致によつて」と。

ドイツの一マルキストが、「倫理と唯物史観」という論文を書いて、「道德は革命によつて決して絶対のものではないが、有力な武器でありうる」といつている。

しかしながら、われわれにいわせれば、「道德は革命によつて欠くべからざる(即ち絶対の)動力である」ただに動力であるのみでなく、それ故にその基礎である。

このように、道德というものは、一寸考えると、われわれ無産者によつて、いかにも迂遠なもののように思われるが、その実決してそうではない。

われわれはいま政治的、経済的に、不当な迫害をこうむっているが、この「不当」など感じるとき、われわれは既に、道德に立脚しているのである。

いかなる思想も、実践も、道德を無視したり、軽視したりする時、それは必ず、不完全なものとなる。

近世ではマルクス、レーニン等の、労働価値説が、道德を無視している。労働価値説とは、ひとくちにいえば、一切の価値を労働におくものである。かくて労働全収権——労働

の全価値は（すべての生産物は）労働者（それを生産するために働いた者）がそれを全部受け取るべき権利をもっているといい、「働かないものは食ってはならぬ」（註一）という主張が生まれるのである。

そうすると、子供、年寄り、病人、産婦といったようなものの生存を支持する、理論的根拠がない。ここにこうした思想の不完全さがある。

これに反して、万人の生存は万人の相互扶助の本能（道德）によつて、支持されるという無政府主義思想は、あらゆるすべての者の生存に対する最も完全な理論的根拠をもつのである。

註一 この主張は、不労所得者（働ける身でありながら、財産とか金利とかで、遊んで食っている者）を排撃することはできるが、「働かない」という言葉そのものにはかなりの疑義がある。例えば王（大統領、中央委員長）とか、指揮者（政務、軍務等の一切の）とか官僚とか、文士とか、俳優とかいうものは、労働者ではないとされている。しかもマルクス主義のように、政治制を採用する限り、これらの者は必ず存在する。では「働かない」これらの者は「食ってはならない」という言葉が真実ならば、何故政治制をとるか。

二 無政府道德の位置する歴史的段階  
たいへんむずかしいみだしですが、便宜上ゆるしてもらいます。

十八年

われわれが、道德の歴史を、一頁でも読んでみる。すると昔からこのかた、いかに多くの道德論が、行われていたかを知ることができる。

さてその雑多な道德の歴史は、いかに区分さるべきだろうか。

ある哲学者は、宗教の歴史を、「始めに天下りの宗教——即ち宗教は神の意志であるという説——があり、次に宗教は人間の所産であるということになった。さらに人間の所産であるというより、経済の所産であるということになった。宗教史はこの三期にわけてよい」といつている。

このわけ方は、その人のいつているところによると、マルクス、エンゲルス等の「フオイエルバッハ主義」批判からきたものであるというのだが、では、「フオイエルバッハ主義」をいかに彼等が批評したかという点、いわく「ヘーゲルの宗教観——絶対的意志の歴史的発顕であるとするその宗教観を、その逆立ちからくつがえしたものはフオイエルバッハであつて、彼は宗教を人間の所産であるといつた。だが彼はその人間なるものが経済によつて、規定されていることを知らない。今やわれわれによれば、宗教は即ち経済の所産である」

かくて、神——人間——経済と、この三つに歴史が分けられる。この分けかたは、初めフランスの哲学者によつて、試みられたものだともいう。が、それはどうでもよい。わたしに必要なのは、この分けかたを、道德の歴史に借りることなのである。

神——然り、道德においても、理論的、実践的にかなり長い間、神というものがつきま

とつた。これは西洋において特にはなほだしい。西洋の昔、ギリシャの国に三つの道德思想があつた。共にソクラテスから出ているものである。ソクラテスは「実践道德」の主張者であるといわれ、「道德を天上から地上へ引きおろした人」であるとよばれた。彼は、「むずかしい理論は必要ではない。ただ善行が目的である」という極めて素朴な道德思想をもち、何が善行であるかを洞察するために、態度を革命した人である。それまでの社会では、人々は「自然を対象」として観察し、帰納することにとらわれていた。それをソクラテスが、対象を「人心」にもとめた。「自己の内部に宇宙あり」という主張が始まつた。

この主張から出た三つの流派——一つはソクラテスの弟子のプラトン、この人はソクラテスが「天上から地上へ引きおろした」道德を、再び天上へ引き上げた。いわく「自己の内部の純粹なる部分を支配するものは絶対觀念(神)である」プラトンの直系のアリストテレスは、プラトンの道德を実践的ならしめた。彼は即ち意志と習慣を道德の要素であるとした。さて第二にはソクラテスの弟子アンティセネスは、その弟子ディオゲネスと共に、犬儒派の祖であり、道德の確立は、自己を欲望(自然の支配する)から、離脱するにあるとした。第三は犬儒派から分れてストア派となつたもので、デイオゲネスのごときは狂人であつて、賢者はむしろ調和を楽しむ」という、「調和主義」の主張である。

この三つのギリシャ道德思想は、いずれもキリスト教のもちいるところとなり、いわゆる「神」の思想と一致した。その後中世紀から近世初期にかけての多くの道德思想は、理論的にこの三つの派の影響を受けることが多かつた。そうした時代において、一般民衆は

十代外

「すべての道德は神の命ずるところである」と考え、主人の憐憫に対し、臣下の忠誠——即ち階級道德が、社会道德の根本であつて、それはいかんともしがたい絶対天下りの道德であるとされてきた。民衆はその道德に対して、全然に無力であつた。

近世になると、フォイエルバッハ等の「道德は神の意志ではない。人間が自己の幸福のために創造したものだ」という主張が生まれた。これはブルジョアの人道愛と一致するもので、ブルジョアの人道愛はたぶんに利己的、功利主義的である。一例を挙げると「貧しい人を愛せよ」「不具者をあわれめ」労働者を軽蔑するな、労働は神聖で、彼は国家のために神聖な労働をしているのだからといったようなものである。即ち明らかに階級道德である。

しかしながら、神から人間に至る、この二時代の階級道德は、自らの何であるかを知らなかつた。彼等は明らかに階級道德でありながら、そのことを意識しなかつた。

マルクスやエンゲルスの出現は、この点において、はなはだ有意義であつた。彼等は、「道德の階級性」を説き、あらゆる階級道德の存在を確保した。これより前フランスあたりに、「道德は国家の便宜によつて創造される」と看破したものがあつたが、今や道德は宗教とひとしく、人間を規定する経済——その経済の必然の矛盾による二個の対立せる階級を基調とすると(幾分か曖昧にはあつても)考えられた。

かくて、すべての道德は「階級のために」という目的のもとにおいてのみ善である、というところが、彼等によつて、はっきりと白状された。

実にそれはその通りである。中世の神の道德、近世の人間の道德は、共に「階級のための道德」でありながら、全宇宙全人類の仮面をかぶっていたのである。そして今やそれが暴露されたのである。

かくて今や、彼等階級道德者等は、一種マキャベリ的思想を基調とすることによって、「階級のために」なる道德思想を公然と行動するに至った。そして「階級のために」なる名のもとに、いかに多くの悪（不自然）が行われているかはいうまでもない。

不自然——わたしはここで一言しよう。階級道德が特に婦人に対して与えている迫害は、この不自然を中心とするものである。婦人問題とよばれているものは、普通二つの種類にわけて考えられる。その一つは権利の不平等の問題で、二は性（母性を中心とする一切の自然的事実）の不自然の問題である。然るに権利の不平等の問題は、既にブルジョア社会においてすら、解決されている（普通性別的運動といっているものがこれである）。だから、この問題は、婦人にとって大したものではない。困難なのは、性の不自然の問題である。神の道德以来あらゆる階級道德が、いかに性を輕蔑し、その自然を踏みしめることに努力してきたかは、宗教が婦人を「邪淫」であると見たことによつてもうなずかれる。それのみでなく、母性の自然ははずかしめられ、「水兵の母」などという国家社会、即ち階級のためにわが子を犠牲にする母が、模範的の母とされる。ゴルキーの『母』などの重宝がられるのも、階級道德の「母」を中心としているからである。

これに対して、わたしども無政府主義婦人は、「母性よ奮起せよ！ その自然の頑強さ

十九内

をもつて、国家の諸權威と対立せよ！ 彼等を足もとに踏みしめろ！」と叫ぶのである。

階級のために「母」が踏みじられてきた歴史は、即ち婦人被虐の歴史である。そこには母性を中心とする一切の性の自然を虐げるために、網の目のように張り渡された家族制度、結婚制度、育児、教育の諸制度等々がある。かくて婦人問題は、自然を支持する道德であるところの無政府道德の抬頭と勝利とによつてのみしか解決されない。

然るに、かつてソクラテスが、人々の思考の対象を「自然」から「人心」へと転移して以来、社会の歴史は各時代を通じて、「自然を輕蔑」する歴史（意識的には）であったが、その一面においては、「再び自然へ」の道程（無意識的には）において進展してきたのであることは注目すべきである。

神（超自然）の道德が、やがて人間の道德（より多く自然が主観されるところの）となり、それが經濟の道德（ここに至つて人間を離れてある種の自然絶対の觀念が採用される）となったところに、その足跡がよまれるのである。かくて「自然」は再び進歩せる形において、その雄姿を現わすべく、準備され、待望されているのである。そして、道德の歴史が先駆的にそれを証明した。

神——人間——經濟——自然。道德の歴史は、いまやこの四期に区分されることになった。神、人間、經濟までが階級道德であり、それらは無政府道德と対立するものである。最後の段階における先駆者は、クロボトキンであろう。彼は道德を、階級社会のためのもの（即ち人為的のもの）ではなくして、自然のものであるとした。われわれは教えられ、

命ぜられることなくして、自然的に道德的であるというのであつた。彼の『相互扶助論』(註一)はこのことを証明するためのものである。

註二 『相互扶助論』は、クロボトキン名著で、彼はダーウィンの流れをくむ一派の「生存闘争」説に對抗して、この新説を立てた。彼は動物、人類を通じ、「相互扶助」本能によつて、社会生活を営むことを語り、「生存闘争」は錯誤的の場合のものであることを示唆した。

### 三 似て非なる無政府道德その他

階級道德と無政府道德との相違およびその歴史については、ほはいったとおりである。かくて、さらに次のように言える。クロボトキンのみが、無政府道德ではない。それはむしろ序幕で、われわれの道德としての無政府道德の天地は、もつと自由かつ無限なのだ。学理によつて証明され、歴史によつて規定される(と我から好んで考えることはいらぬ)ようなもののみがそれでないことは、もちろんなのである、と。

かくて、無政府道德の一つの示唆として、わたしは放浪者道德をもつてこようと思う。このことは生田長江氏が端的に言い、伊福部隆輝氏が歴史観的に立証したことがある。即ち、ルンペンの道德である。ルンペン——人はこの言葉をわらいがちである。それは多く故なきわらい、嘲りではない。

ここに汽車があつて、汽車の中に多くの人が乗っている。彼等はぶきつちよなしかめつ

らをして、互いに睨みかわしている。それを道德であり、作法であり、礼儀であると思得ている。そこへ一人の放浪者が乗り込んで、金持ちと貧乏人、大臣と百姓の区別なく、肩を叩いて話しかける。話しかけられた者どもは、この非常識な礼儀の持ち主に対して、異様な感じをもつ。が、内心では、この無作法者にむかつて、一斉に愛を感じるであらう。自由と慰安を感じるであらう。

階級道德は、人々をかたく捉えて、自己階級以外の者、自己民族以外の者との、無用な談話を禁ずる。ゆえに人々は、ぶきつちよのしかめつらをもつて、睨み合うことを道德であると思得ているのだ。だが、超階級の放浪者の出現は、人々をして、自らの滑稽な立場を悟らせる。人々は急に自由を感じる。

だが、階級社会(即ち支配者の社会)は、階級道德を絶対に必要とする。もし人が超階級の道德に落ち込むようなことがあれば一大事である。だから支配者は、それに落ち込ませる危険のある偉大な文芸(偉大な文芸は常にルンペンのものである)とか、美術とかを迫害した。また、歴代の階級社会は、いずれもルンペン(放浪者)を、極度に輕蔑してきたのである。(それは支配者にとつてためにならぬものであるからだ)

だが今やルンペンの理解される時はきた。彼は無政府道德に解消することによつて、その飽くなき自由への示唆を十分に有効ならしめるであらう。

だが、ここでいいたいことは、ルンペンは故郷をもたないということだ。故に彼が都市の頹廢味と結びつく、始末におえないものとなる。巷間「無政府主義者」を名のる者の

中に、この種の者を見ることがないとはいえない。やたらに酒代を脅喝したり、無闇に暴力を揮うといったような者である。これらの者は「相互扶助」を食い物にして、その実醜き個我を強調する。それが一層神經的になると、個我独裁病を呈する。「自分」というものに、恐ろしく自信があり、天下の革命児は我一人かのように考える。彼等は無政府主義が最も排撃するところの「人が人を支配」し「人が人を裁く」ことを、敢えてするに至る。人を見れば小ブルジョアとなし、ルンペンと罵り、我のみ独り真のアナキストであるという。これらの者は全然にエセ・アナキストたるを失わない。のみでなく「人を見れば睨む」ところの階級道德からの派遣者ですらある。

即ち、わたしは言いたいのだ。アナキストの道德は、階級道德の「疑いを以て人を迎える」狹隘さに比べて、それとは反対に、万人に対する心からなる信頼と寛大さによって始めて樹立されるものであることを知らねばならない、と。